

## 青年期の彷徨と邂逅

佐藤幸治

Sato Koji

京都大学名誉教授

私は(旧)新潟市から十里程離れた農村に生れ、その村立中学から新潟高校に進んだ。高校の図書室は“宝の山”のようにみえ、放課後そこで本を漁り、トルストイやドストエフスキーの小説等を読み耽った。授業もおもしろかったが、特に国語の渡辺秀英先生と英語の志賀哲夫先生と出会い、良寛や西行あるいは英米の詩人たち(エマーソンやソロー等)の詩魂に触れたことが、その後の人生観に深い影響を及ぼすことになる。

昭和31(1956)年のハンガリー動乱(スターリン体制に反対した市民蜂起がソ連軍に鎮圧された事件)の衝撃も大きく関係していたが、京都大学に入学後のいわば精神的空白状態(虚無的な気分)の中で乱読の日々を過した。そうした書の中に、ニーチェ、サルトル、カミュ等とともに、**西田幾多郎『善の研究』**(岩波文庫、初版は弘道館、1911年)があった。難しく歯が立たなかったが、徹底的に考えるとはどういうことかは感じ取れ、学問への尊敬と「畏れ」のようなものを抱き、その思いは心に深く沈澱した。そうした意味において、敢えてここに「その一冊」としてあげる。もっとも、この書にあった「人格とは意識の統一力である」とか「我々の良心とは調和統一の意識作用」といった表現が妙にげざやかに心に残り、後の研究上の思考に具体的に作用したと思えるところがある。今、上田閑照『宗教』(岩波現代文庫、2007年)を味読する中で、再び『善の研究』を手にとっている。

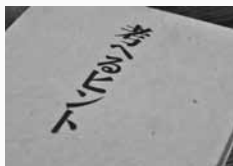
次に、私の人生観と思考の歩みに大きく影響したものとして、**小林秀雄**の諸作品をあげなければならない。小林については既に高校時代に知り、大学入学後様々な作品を読むことになる。ここでは、昭和34(1959)年から雑誌『文藝春秋』に連載されたエッセーをまとめた『**考へるヒント**』(文藝春秋社、1964年)をあげるが、他の多くの書も手にし、これまで幾度も味読したエッセーが少なくない。一言でいえば、モノをよく観、よく考えるとはどういうことかを教えられてきたということであるが、「良心の問題は、人間各自謎を秘めて生きねばならぬといふ絶対的な条件に、固く結ばれてゐる」、「個人主義の時代は去つたと言

ふ。……個人主義の思想の缺陷を突く考へ方は、いくらでも出来よう。だが誰も實際生活の上で、個人といふ或る統一體の形でしか生きやうがないといふ基本の事實には歯が立つわけがない」、「政治は、私達の衣食住の管理や合理化に関する実務と技術との道に立還るべきだ」等々は、そこに至る過程の小林の思索の真摯さと深さを思い、読むたびに心に鋭く切り込んでくる。

小林について、もう一つ述べておきたいことがある。戦争中に書かれた「西行」は大学入学後すぐに読



『善の研究』



『考へるヒント』

んでいたが、その後しばらくして別の書を通じて西行が明恵上人に語ったという歌論に触れた。月も花も郭公も雪もおよそ相あるところ、皆これ虚妄ならざるはない、であるから花を詠んでも花と思ったこともなければ、月を詠ずるが実は月だと思ったことはない、「虚空ノ如クナル心ノ上ニオイテ、種々ノ風情ヲ色ドルト云ヘドモ更ニ蹤跡ナシ」。良寛との基調の共通性に驚いたが、青年期特有の虚無感から最終的に脱却せしめたのは、このような西行や良寛にみられる、無限の時間・空間において一人の人間として今ここにあることへの透明な肯定の精神のあり様に心動かされたためではなかったかと思えてならない。

第三に、**モンテスキュー(宮澤俊義訳)『法の精神(上)(下)』**(岩波文庫、1928年、1930年)をあげたい。その「序文」には、「余はまづ人を研究した。そしてこの無数の法と習俗の中に於て、人は決してその気紛れのみによつて支配されてゐるのではないと信じた」とし、「余は原理を定立した。さうすると、すべての特殊の場合が自らそれに従ひ、あらゆる國民の歴